



女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Models との関連

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 戸田, 弘二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00003734

女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Models との関連

戸 田 弘 二

【問 題】

親の養育態度が子どもの性格や行動に関わることを指摘する研究は多い。親の受容的な態度や自律性の尊重は、子どもの自尊心を高め (Grove, 1980 ; Perterson, et al., 1983 ; Kawash, et al., 1985), 安定した情緒の発達を促し (Ainsworth, et al., 1978 ; Matas, et al., 1978), 子どもの向社会的行動を育てる (Waters, et al., 1979 ; Bar-Tal, et al., 1980) ことがこれらの研究から示唆される。確かに、親の暖かく愛情のこもった養育は子どもの社会・情緒的発達の基底を担っているものと思われる。ただし、これらの結果から即座に「親がコレコレの育て方をすると子どもはコレコレの性格を形成する」などの法則性を見いだすわけには行かない。というのも、親の養育態度が子どもの性格や行動に影響する場合、図1に示すような二つのルートが考えられるからである。①のルートは、親の実際の態度(客観的環境)が直接子どもの性格や行動に影響する場合である。例えば、社会的ルールに合うように子どもが自らの行動を統制できない時期には、親が様々な言語を用いて子どもの行動を直接統制することによって、子どもの社会・情緒的発達は促されることになる。一方、②のルートでは、親の実際の態度は一旦子どもの頭の中で情報処理され、意味が付与される。そして、この認知された親の態度(主観的環境)が子どもの性格や行動に影響することになる。例えば、親は受容的な態度で子どもに接しているつもりでも、その態度が子どもの期待や欲求にそぐわないものであるならば、子どもはそれを受容的とは受け取らないであろう。逆に、親が忙しくあまり子どもに関わることができなくても、子どもが親の状況を理解し、親の愛情を信じているならば、親のわずかな接触も子どもには受容的な態度と認知される。どちらのルートが子どもの性格や行動に強く影響するかは、その影響する領域や子どもの発達段階によって様々であろうが、児童期以降においては一般に②のルートの影響が強くなるものと思われる。例えば、森下(1981)は小学校4年生と6年生及びその母親、計688名に対して質問紙調査を行い、母親の養育態度と子どもの性格についての相関的研究を行っている。その結果、母親自身の養育態度に関する評定との間には有意な相関は少なく、子どもの評定する母親の養育態度との間に多くの有意な相関が認められた。このことから森下は「子どもの行動に影響を与えるのは、客観的な環境ではなく、子ども自身に認知された環境である」(P.53)と考察している。すなわち、子ども自身の認知の仕方が、子どもの性格や行動の予測にとって重要なポイントとなる。

さて、このような子どもの認知の枠組みは親との相互作用を経て徐々に子ども自身の中に形成されて行くものと思われる。Bowlby(1973/1980)は、親との attachment 関係の中で子どもに内在化される自己及び他者に関する表象を Internal Working Models (以下、IWM と略す) と呼んだ。彼によれば、人はこの表象を用いて外界からの刺激を選択的に取り入れ、解釈し、行為の計画を立てる。すなわち、IWM は我々の外界の認知や行動プランを立てるためのルールを提供してくれるの

である。従って、親の養育態度を認知する場合には、過去の attachment 関係において内在化された両親の表象が子どもの認知のあり方に深く関わるものと思われる。

これまでのところ、小学生、中学生を対象とした研究では、親の養育態度の次元として、情緒・愛情に関する因子と行動の統制に関する因子が共通して見いだされている。(小嶋, 1970 a; 森下, 1978)。本研究では女子短大生を対象としているが、彼女らの認知構造にも同様の次元がみられるだろうか。また、その次元は父親(あるいは母親)に特有な養育態度の認知次元なのか、それとも彼女らは対象を区別することなく親の養育態度を認知しているのか。

そこで、本研究ではまず最初に、①親の養育態度はどのような次元で青年に認知されているのか。また、父親の養育態度と母親の養育態度は互いに独立して認知されているのか、という点について検討する。次いで、② IWM と養育態度の認知次元との関連について検討する。

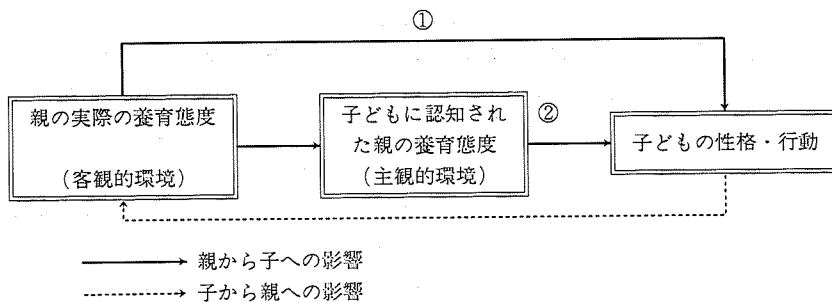


図1. 親の養育態度と子どもの性格・行動の関係

【方 法】

1. 被験者：北海道内にある私立O女子短期大学の学生200名。年齢は18歳～21歳で、平均年齢は18.4歳(SDは0.55)である。

2. 質問紙の構成：年齢、家族構成などの基本的属性に関する項目の他は、以下の項目群によって構成されている。

①親の養育態度に関する項目¹⁾

従来の養育態度の研究の多くが、情緒や愛情に関する因子と行動の統制に関する因子とを見いだしていることを考慮し、Schaefer (1965) や小嶋 (1969, 1970 a) の児童用尺度を参考にしながら、この2次元を測定するための項目を新たに作成した。項目の内容は、対立するふたつの態度からなっており、情緒や愛情に関する次元としては、子どもの情緒的支えとなり、意見や考えを尊重し受け入れてくれる態度(11項目)と子どもへの無関心や放任の態度(10項目)を設定した。また、行動の統制に関する次元としては、子どもを意のままに支配しようとしたり、口うるさく指図する態度(12項目)と子どもの行動をいっさい統制しない態度(9項目)から成っている。これら42項目について父親、母親への認知を“あてはめる”から“あてはまらない”の5件法で、計84回(2対象×42項目)の評定を求めた。

②Internal Working Models (IWM) に関する項目

戸田 (1988) により構成された21項目(3下位尺度×7項目)を用いた。評定は“非常によくあ

てはまる”から“全くあてはまらない”の6件法で行った。

3. 調査時期・実施方法：1989年8月下旬に、一般心理学の講義中に無記名で集団実施した。

【結果と考察】

1. 養育態度に関する認知の次元

親の養育態度に関する認知の次元を決定するために、上記の42項目への回答を用いて父親、母親別に因子分析を行った。共通性の初期値には1を設定して反復推定による主因子法で因子解を求めた。固有値の減少率及び仮説等を考慮して、2因子解と3因子解が選択された。そして、より単純構造を得るために Varimax 法によって回転を行い、最終的に表1に示す結果を得た。表1には父親、母親別の2因子解と3因子解における因子負荷量が示されている。一見して、2因子解、3因子解ともに、父親と母親への認知はほぼ同様の構造を成していることがわかる。

まず、2因子解をみる。第I因子は「いつも私の考えや意見を聞いてくれる」「私と話す時間を大切にする」「なにかと私に暖かい言葉をかけてくれる」など親の理解や受容を表す項目と「めったに私のために何かをしてあげてくれない」「父(母)にとって私の存在は、あまり大きくないようだ」「私に対する思いやりに欠けるようなところがある」など、子どもに対する無関心や思いやりの欠如等を表す項目に負荷が高い。このことから第I因子は「愛情—無関心」の軸と解釈される。一方、第2因子は「私の取るべき行動をいちいち指示する」「どんな時でも私がすることに指図したがる」「私が親のすすめた通りにしないと気を悪くする」など、子どもの行動に対する親の統制を表す項目と「夜遅く帰ってきてもうるさく言わない」「私に物事を強制することはめったにない」など非統制を表す項目に負荷が高い。このことから第2因子は「統制—非統制」の軸と解釈される。

このように、2因子解の結果では仮定通りの2次元を得ることができたが、非統制を表すと考えた項目の一部が2因子のどちらにも属さないことがわかった。そこで3因子解で同様の分析を行ったところ、これらの項目が第3因子に負荷することがわかった(なお、3因子解の場合でも、第I因子と第II因子は2因子解の場合とほとんど同じ結果を得ている)。第III因子の内容を見ると、「いつも私のいいなりになる」「私の顔をうかがっているようなところがある」「私がものを欲しがると、だめとは言わない」「私が良くないことをしても、見てみぬふりをする」など、親の統制力の弱さを表す項目に負荷が高い。第II因子の非統制側が「統制しない」という子どもの認知を示しているのに対して、第III因子は、同じ非統制でも「統制できない」という子どもの認知を示すものと思われる。このことから第III因子を「服従」の軸と解釈した。小嶋(1970a)の結果でも統制の次元は「心理的統制」と「ゆるい統制」に分かれており、本研究の第III因子は、小嶋の「ゆるい統制」(例えば、「したいことは、なんでもさせてくれる」「わたしがなにか悪いことをしても、軽いばつだけでゆるしてくれる」など)とほぼ同様の内容を示していることから、3因子解を採用した。このように、短大生の認知する親の養育態度にも小学生の結果(小嶋, 1970a)と同様の3因子構造が確認された。

次に父親への認知次元と母親への認知次元との関連を検討するために、父親と母親に関する上記の各因子得点間の相関係数を算出した(表2参照)。その結果、同一因子間の相関が、.541～.654とかなり高く、親の養育態度は同一次元で認知される傾向が強いことが明かとなった。また、父親の統制と母親の服従の間に.236、父親の服従と母親の統制の間に.165と弱いながらも有意な相関がみ

表 1. 養育態度の因子分析結果 (Varimax回転後)

項 目 内 容	父 親 へ の 認 知 構 造					母 親 へ の 認 知 構 造				
	(2 因子解)		(3 因子解)			(2 因子解)		(3 因子解)		
	I	II	I	II	III	I	II	I	II	III
42. いつも私の考えや意見を聞いてくれる	.774	-.204	.776	-.196	.028	.748	-.140	.755	-.115	-.044
22. 私と話をする時間を大切にす	.724	.039	.723	.047	-.006	.682	.084	.673	.109	-.089
10. なにかと私に暖かい言葉をかけてくれる	.689	.004	.691	.009	.069	.659	-.112	.688	-.093	.110
15. めったに私のために何かをしてくれない	-.682	.141	-.683	.133	.028	-.601	-.041	-.580	-.064	.171
29. 私の物の見方・考え方を理解しようとしてくれる	.624	.319	.647	-.314	.038	.618	-.266	.640	-.246	.033
19. 一緒にいると、気楽な気持ちにさせてくれる	.642	.138	.644	-.133	.063	.595	-.190	.601	-.169	-.051
18. 父(母)にとって私の存在は、あまり大きくないようだ	-.643	.035	-.643	.028	.032	-.629	.092	-.618	.068	.136
30. 私に対する思いやりに欠けるようなところがある	-.637	.243	-.638	.234	.099	-.662	.202	-.647	.175	.189
25. 私と一緒に物事をする機会を設けようとする	.634	.098	.634	.103	.060	.557	.174	.550	.193	-.049
35. あまり私のことを考えていてはくれない	-.630	.088	-.628	.078	.159	-.611	.103	-.565	.074	.366
32. 私のことはあまり関心がないようだ	-.629	-.016	-.624	-.029	.283	-.645	.032	-.595	.002	.375
39. 私が何をし何を考えているかには、あまり興味がない	-.617	-.008	-.612	-.019	.245	-.637	.012	-.603	-.015	.268
3. 私とあまり話をしない	-.592	.132	-.591	.124	.117	-.470	.226	-.473	.209	.069
40. 何かを決めるとき、私の意見を尊重してくれる	.573	-.241	.579	-.240	.202	.504	-.201	.542	-.189	.162
5. 私の悩みや心配ごとを理解してくれる	.565	-.009	.566	-.006	.090	.656	-.176	.685	-.157	.093
14. 相談事を持ちかけやすい	.563	-.101	.566	-.098	.093	.508	-.243	.537	-.228	.091
1. 私の悪いところよりも良いところをみようとしてくれる	.552	-.223	.559	-.223	.247	.531	-.146	.566	-.133	.152
6. 私の意見や考えを軽く聞きながしてしまう	-.483	.330	-.488	.327	-.054	-.593	.357	-.597	.335	.104
34. 私が家に友達をつれて帰ると、 にこやかにもてなしてくれる	.456	.021	.453	.028	-.132	.394	-.116	.406	-.103	.024
13. 私のとるべき行動をいちいち指示する	.036	.737	.030	.735	.080	-.152	.721	-.151	.711	.192
2. どんな時でも私がすることに指図したがる	-.098	.654	-.104	.652	.041	-.007	.613	-.018	.610	.075
7. 私が親のすすめた通りにしないと気を悪くする	-.154	.624	-.161	.623	-.026	-.102	.578	-.123	.574	.010
9. 私に自分で物事を決めさせてくれない	-.220	.622	-.224	.616	.152	-.232	.585	-.208	.570	.314
21. 私のために苦勞してきたことをくどくどと話し聞かせる	-.014	.559	-.016	.554	.192	-.062	.533	-.061	.528	.139
26. することをちゃんとしてしまうようにと、うるさく言う	.239	.547	.234	.549	.024	.257	.537	.230	.547	-.067
41. 言いつけ通りにするまで口うるさくいう	-.072	.553	-.073	.547	.245	-.052	.595	-.074	.593	.004
36. 私の行動についてのちょっとしたことで、 不機嫌になり腹をたてる	-.130	.546	-.137	.546	-.055	-.277	.499	-.296	.490	.017
28. 私のつきあう友達のごとであれこれと口をはさむ	.046	.545	.040	.546	-.020	-.047	.630	-.078	.630	-.046
27. 夜遅く帰ってきてもうるさくいわない	-.144	-.486	-.134	-.493	.257	-.154	-.421	-.111	-.430	.183
38. 私がした間違いをいつまでも覚えていてこだわり続ける	-.255	.480	-.260	.478	.001	-.350	.533	-.365	.520	.056
24. 私の悪いところの方が目につくようだ	-.177	.458	-.185	.461	-.173	-.172	.482	-.203	.478	-.075
8. 私に物事を強制することはめったにない	.245	-.446	.251	-.445	.065	.240	-.430	.264	-.423	.034
20. いつも私のいいになる	.205	-.067	.218	-.080	.660	-.046	.090	.058	.071	.699
31. 私の顔をうかがっているようなところがある	-.200	.228	-.192	.215	.516	-.171	.177	-.102	.159	.497
23. 私が物を欲しがると、だめとは言わない	.101	.089	.110	.078	.509	-.013	-.014	.079	-.029	.589
4. 私が良くないことをしても、見てみぬふりをする	-.256	-.043	-.246	-.056	.500	-.178	-.039	-.110	-.056	.445

られる。服従は統制とは独立した次元で必ずしも反対の態度ではないが、親の一方を統制の次元で認知する場合、他方の親を服従の次元で認知するという、相補的な認知のあり方が存在することは興味深い。

このように、父親の養育態度にも母親の養育態度にも共通した3つの認知次元がみられたわけであるが、父親への養育態度と母親への養育態度は互いに独立した認知構造を成しているのであろうか。それとも親の養育は父親、母親の区別なく上記の3次元によって一括して促えられているので

親の養育態度の認知とワーキング・モデル

表2 - 父親の養育態度と母親の養育態度の間の相関係数 (N=141)

		母親の養育態度		
		愛情	統制	服従
父親の養育態度	愛情	.654***	.055	-.235***
	統制	.023	.541***	.236***
	服従	-.002	.165*	.622***

***p<.001, **p<.01, *p<.05

表3 . 父親, 母親込みにした養育態度の認知構造 (Varimax回転後)

番号	因子1	因子2	因子3	因子4	番号	因子1	因子2	因子3	因子4
F42.	.761				M42.		-.676		
F22.	.686				M22.	.375	-.524		
F10.	.639				M10.		-.685		
F15.	-.668				M15.		.466		
F29.	.662				M29.		-.648		
F19.	.675				M19.		-.590		
F18.	-.552				M18.		.553		
F30.	-.609				M30.		.612		
F25.	.597				M25.	.368	-.378		
F35.	-.532				M35.		.557		
F32.	-.463	.347		.435	M32.		.546		.382
F39.	-.449	.389		.356	M39.		.554		
F3.	-.568				M3.		.509		
F40.	.617				M40.		-.487		
F5.	.521				M5.		-.695		
F14.	.581				M14.		-.517		
F1.	.618				M1.		-.540		
F6.	-.477				M6.		.643		
F34.	.346				M34.		-.422		

F13.			.684		M13.			.564	
F2.			.602		M2.			.520	
F7.			.570		M7.			.486	
F9.			.591		M9.			.496	
F21.			.473		M21.			.442	
F26.			.532		M26.			.478	
F41.			.513		M41.			.512	
F36.			.458		M36.		.425	.360	
F28.			.468		M28.			.462	
F27.			-.467		M27.			-.408	
F38.			.386		M38.		.558		
F24.			.454		M24.			.401	
F8.			-.355		M8.			-.337	

F20.	.353			.564	M20.				.646
F31.				.371	M31.				.388
F23.				.458	M23.				.489
F4.				.357	M4.				.380

注) F1~F42は父親の, M1~M42は母親の養育態度項目

あろうか。この点を検討するために、父親に対する項目と母親に対する項目を合わせて、計72項目（表1で選択された36項目×2対象）への回答を同様の方法で因子分析した。因子数の決定にあたって、各因子の固有値の差から、3、4、5、6因子解を選んだ。その結果、いずれの因子解においても第1因子と第2因子は父親の「愛情－無関心」と母親の「愛情－無関心」の項目に負荷が高く、第3因子以降には父親と母親にまたがった因子が軸出されることがわかった。第3因子以降の項目のまとまりをみると、4因子解が最も適当と思われたので4因子解を採用した。表3には、Varimax回転後の.35以上の負荷量を示してある（項目番号は表1に対応している）。第1因子は、父親の「愛情－無関心」の項目に、第2因子は母親の「愛情－無関心」の項目に負荷が高く、愛情の次元では父親と母親の養育態度は独立した認知次元として軸出された。一方、第3因子は父母の「統制－非統制」の、第4因子は父母の「服従」の項目に負荷が高く、これらの次元では父親と母親の養育態度は独立した認知が成されていない。この結果から、父親と母親は「愛情－無関心」の次元では分化して認知されているものの、その他の次元での認知は、女子短大生の中で分化されていないことがわかる。

2. Internal Working Models と養育態度の認知

これまでのところ、IWMには乳幼児の attachment pattern (Ainsworth, et al., 1978) に対応した3種類のパターンが考えられている(Main, et al., 1985; Hazan, et al., 1987; Kobak, et al., 1988 など)。筆者もこの3パターンを仮定し、これを測定するための尺度を構成してきたが、上記の研究と基本的に異なる点は、この3パターンを対立する類型 (type) としてではなく、同一個人内に併存する相互に独立した特性 (trait) として捉える点にある (詫摩・戸田, 1988)。そこで、まず最初に被験者の持つ IWM の内容を検討するために、IWM に関する 21 項目への回答を変量に養育態度の分析と同様の因子分析を行った。固有値の減少率及び仮説から3因子解が適当と判断されたため、因子数を3に決定し、Varimax法により回転を行った。項目の取捨選択をくり返し、最終的に表4に示す結果を得た。その結果、女子短大生においても従来の結果 (詫摩・戸田, 1988; 戸田 1988, 1989 a, b, 1990) と同様の因子構造を得た。第I因子は「私は知合いができやすい方だ」「初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある」「気軽に頼ったり頼られたりすることができる」など secure な表象に関連する項目に負荷が高く、secure 特性を表している。第II因子は「人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある」「時々友達が、本当は私を好いてくれているのではないかと、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある」「ちょっとしたことですぐに自信をなくしてしまう」など ambivalent な表象に関連する項目に負荷が高く、ambivalent 特性を表している。第III因子は「あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりするとイライラしてしまう」「どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう」「私は人に頼らなくても、自分一人で十分にうまくやって行けると思う」など avoidant な表象に関連する項目に負荷が高く、avoidant 特性を表している。以後の分析では、この3因子の因子得点をもって各 IWM の強さを測る指標とした。

次に被験者の IWM と親の養育態度に対する認知との関連を検討するために、IWM に関する3つの因子得点と養育態度に関する6つの因子得点（2対象×3因子）との間の偏相関係数を算出した（表5参照）。偏相関係数を用いた理由は、親の養育態度の認知に3種類の IWM が各々異なった方向で関連していることが予想されたからである。偏相関係数を用いることによって、例えば secure 特性と父親の愛情との相関を見る際に、ambivalent 特性と avoidant 特性を制御することに

表4. Internal Working Models尺度の因子分析結果 (Varimax回転後)

項 目 内 容	因 子 負 荷 量		
	I	II	III
1. 私は知合いができやすい方だ	.826	.111	.062
4. 私はすぐに人と親しくなる方だ	.809	.074	.006
19. 初めて会った人とでもうまくやって行ける自信がある	.717	-.101	-.028
7. 私は人に好かれやすい性質だと思う	.588	-.287	-.055
13. 気軽に頼ったり頼られたりすることができる	.578	-.088	.055
10. たいていの人は私のことを好いてくれていると思う	.531	-.300	-.030
2. 人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれて いるのではないかと思うことがある	-.085	.719	.113
5. 時々友達が、本当は私を好いてくれていないのではない かとか、私と一緒にいたくないのではと心配になること がある	-.107	.713	.129
20. ちょっとしたことですぐに自信をなくしてしまう	-.139	.676	-.115
8. 自分を信用できないことがよくある	.139	.618	.181
11. あまり自分に自信がもてない方だ	-.155	.612	-.118
14. 私は誤解されやすい方だ	-.073	.460	.148
9. あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しく なることを求められたりするとイライラしてしまう	.016	.164	.720
21. どんなに親しい間柄であろうと、 あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう	-.116	.162	.656
3. 人に頼るのは好きでない	.019	.029	.600
6. 私は人に頼らなくても、 自分一人で十分にうまくやって行けると思う	.068	-.134	.569
15. 人は全面的には信用できないと思う	.021	.450	.536
12. あまり人と親しくなるのは好きでない	-.542	.022	.499

表5. Internal Working Models と養育態度の偏相関係数 (N=121)

	父 親 へ の 認 知			母 親 へ の 認 知		
	愛 情	統 制	服 従	愛 情	統 制	服 従
secure	.214**	.028	.010	.223**	.042	-.070
ambivalent	-.215**	.203*	-.002	-.109	.121	.096
avoidant	-.257**	-.064	.162*	-.161*	-.112	.091

**p<.01, *p<.05

よって、これらの2特性と父親の愛情との相関の影響を取り除いた、純粹に secure 特性との相関を見ることができる。その結果、secure 特性との間には、父親の愛情 (.214) と母親の愛情 (.223) に有意な正相関がみられた。また、ambivalent 特性との間には、父親の愛情 (-.215) に負の、父親の統制 (.203) との間には正の有意相関が、avoidant 特性との間には、父親の愛情 (-.257) と母親の愛情 (-.161) との間に負の、父親の服従 (.162) との間に正の有意相関がみられた。secure 特性は、自己や他者との関係に関して信頼感のある安定した表象の程度を表している。そのような表象は、attachment 対象である両親を認知する際にも当然用いられ、それが愛情の次元との正相関として表れたものであろう。

一方、insecure の2特性は愛情の次元では負の関連を示していた。すなわち、insecure 特性の強さは、両親が自分に対して無関心であり、思いやりに欠けるといった認知と関わっていることを示

している。特に、ambivalent 特性より avoidant 特性にこの関連は強い。青年のもつ IWM の質が、乳幼児の attachment pattern の連続線上にあるかどうかについては、いまだ仮説の域を出ないが、この結果は乳幼児の attachment 研究の報告と一致する。ambivalent を示す乳幼児の親は不適切で中途半端ではあるけれども、まだ avoidant な乳幼児の親ほどには子どもを拒否したり無視することはない。青年の持つ IWM の質がこのような乳幼児期の経験を反映しているという証拠はないが、筆者は青年の IWM の形成には過去の attachment 経験がかなりの程度関与しているものと考えている。というのも、初期の attachment 関係において形成された IWM は、後の attachment に関連した様々な出来事とそのモデルの中に同化し(時には多少の調節を行いながら)、より複雑な階層的認知構造へと発達して行くと考えているからである。また、avoidant 特性は父親の服従と、ambivalent 特性は父親の統制と正相関がみられたことも青年を対象とした従来の研究報告から解釈される。Kobak, et al. (1988) によれば、Dismissing (avoidant と同義) に分類された者は attachment 関係に価値を置かず、親の機能を過小評価する傾向にある。服従的な態度は統制できないという認知に通じる。avoidant な IWM は親の影響力を過小評価する方向に機能するのであろう。一方、戸田 (1989 a) によれば、ambivalent に分類された者は他者の反応を極端に解釈する傾向がある。親の統制的な態度は ambivalent な IWM を通すことで、より極端な統制として認知されるのであろう。

最後に、insecure の 2 特性は母親よりも父親の養育態度の認知と強く関わっていた。最初の attachment 対象は一般に母親であり、この母親との関係から IWM の基底部が構成されるものと考えられるため、この結果は意外であった。これが本研究の被験者(女子短大生)の性による効果なのか、または被験者の性に関わらず青年の IWM が父親の認知により関わっているためなのかという点については今後の課題としたい。

【要 約】

親の養育態度はどのような次元で青年に認知されているのか。また、父親の養育態度と母親の養育態度に対する認知は互いに独立しているのか。Internal Working Models は親の養育態度の認知にどのように関わっているのか。

以上の点について検討するために、女子短大生 200 名に対して質問紙調査を行った。主な結果は以下の通りである。

①親の養育態度に関しては、父親、母親共に「愛情—無関心」「統制—非統制」「服従」の 3 つの次元が確認された。父親と母親の間で、各次元の相関を求めたところ同次元間の相関が高く、両親の養育態度は同次元で認知される傾向にあることがわかった。また、父親と母親への回答を一括して因子分析を行った結果、父親と母親は「愛情—無関心」の次元では分化して認知されているものの、その他の次元では分化せずに認知されていることがわかった。

②被験者の持つ IWM の質によって、親の養育態度の認知が異なることが確認された。secure 特性は、愛情の次元と正の相関を示し、逆に insecure な 2 特性は負の相関を示した。上記の結果が、従来の attachment 研究との関連で考察された。

【引用文献】

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of Attachment*. Hillsdale, N. J.: Erlbaum.
- Bar-Tal, D., Nadler, A., & Bleckman, N. 1980 The relationship between Israeli children's helping behavior and their perception of parents' socialization practices. *Journal of Social Psychology*, 111, 159-167.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss: Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (黒田実郎 他訳 母子関係の理論II: 分離不安 岩崎学術出版社 1977)
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss: Vol. 3. Loss: Sadness and Depression*. New York: Basic Books. (黒田実郎 他訳 母子関係の理論III: 愛情喪失 岩崎学術出版社 1981)
- Grove, G. A. 1980 Parental behavior and self-esteem in children. *Psychological Reports*, 47, 499-502.
- Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Romantic Love Conceptualized as an Attachment Process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 3, 511-524.
- Kawash, G. F., Keer, E. N., & Clewes, J. L. 1985 Self-esteem in children as a function of perceived parental behavior. *Journal of Psychology*, 119, 235-242.
- Kobak, R. R., & Sceery, A. 1988 Attachment in Late Adolescence: Working Models, Affect Regulation, and Representations of Self and Others. *Child Development*, 59, 135-146.
- 小嶋秀夫 1969 親の行動の質問紙の項目水準におけるバッテリー間因子分析 金沢大学教育学部紀要(社会・教育・人文科学編), 18, 55-70.
- 小嶋秀夫 1970 a 親の行動インヴェントリー(PBI)の検討-Balanced Scales- 金沢大学教育学部紀要(人文・社会・教育科学編), 19, 129-144.
- 小嶋秀夫 1970 b 親子関係の理解(一) 児童心理, 24, 1644-1661, 1812-1829.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points in attachment theory and research*, Monographs of the Society for Research in Child Development, 50, 66-106.
- Matas, L., Arend, R. A., & Sroufe, L. A. 1978 Continuity of Adaptation in the Second Year: The Relationship between Quality of Attachment and Later Competence. *Child Development*, 49, 547-556.
- 森下正康 1978 親の養育態度と子どものパーソナリティの発達に関する因子分析的研究 和歌山大学教育学部紀要(教育科学), 27, 53-72.
- 森下正康 1981 養育態度の認知差と子どもの性格に関する発達の研究 和歌山大学教育学部紀要(教育科学), 30, 43-55.
- 奥本倫子 1990 親の養育態度が子どもの母性に及ぼす影響 北海道教育大学平成元年度卒業論文(岩見沢分校)
- Perterson, G. W., Southworth, L. E., & Peters, D. F. 1983 Children's self esteem and maternal behavior in three low-income samples. *Psychological Reports*, 52, 79-86.
- Schaefer, E. S. 1965 Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development*, 36, 413-424.
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人態度-成人版愛着スタイル尺度作成の試み-東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 戸田弘二 1988 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル-作業仮説(working models)からの検討-日本心理学会第52回大会発表論文集.
- 戸田弘二 1989 a 青年期における基本的対人態度と愛着スタイル(2)-対人認知場面における情報処理の違い-日本教育心理学会第31回総会発表論文集.
- 戸田弘二 1989 b 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル(3)-working modelと母親に対するイメージ-日本心理学会第53回大会発表論文集.
- 戸田弘二 1990 Internal Working Modelと情動制御-「あがり」の場合-日本心理学会第54回大会発表論文集.
- 戸田弘二・奥本倫子 1990 Internal Working Modelと親子関係認知 日本発達心理学会第1回大会発表論文集.
- Waters, E., Wippman, J., & Sroufe, L. A. 1979 Attachment, Positive Affect, and Competence in the Peer Group: Two Studies in Construct Validation. *Child Development*, 50, 821-829.

戸田 弘 二

【付 記】

1. 親の養育態度に関する項目を作成するにあたり、奥本倫子の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。なお、項目作成にあたっての詳細は、奥本（1990）を参照されたい。

2. 本稿の一部は、日本発達心理学会第1回大会において「Internal Working Modelと親子関係認知」（戸田・奥本，1990）と題して発表されている。

（本学講師 岩見沢分校）